

聖經

天使の言葉



聖經

天使の言葉





# 招 神 歌

生いきとし生いけるものを生いかし給たまへる御祖神元津靈みおやがみもとつみたまゆ幸さきはへ給たまへ。  
吾わが生いくるは吾わが力ちからならず、天地あめつちを貫つらぬきて生いくる祖神みおやの生いのち命ち。  
吾わが業わざは吾わが為なすにあらず、天地あめつちを貫つらぬきて生いくる祖神みおやの權能ちから。  
天地あめつちの祖神みおやの道みちを傳つたへんと顯あれまし、生長せいちやうの家大神いへのおほかみま守まもりませ。



天  
使  
之  
會  
家

雅  
集  
書



『久遠生命』の神示

○

吾が臨れるは物のためではない、生命のためである、肉のためではない、靈のためである。これを感じるものは少い。物の生滅に心を捉へられ、物が殖えたときに信仰を高め、物が減つたときに信仰を失ひ、身體が健康になつたときに神を讃へ、家族の誰かに病氣が起つたと云つては信仰を失ふが如きは、神を信じてゐるのではなく物を信じてゐる

るのである。物は結局移り変わるものであるから、物の御利益の上に建  
てられた信仰は、物の移り変りによつて壊れるのである。神が病氣を  
治して見せるのは、肉體は心でどうにでも移り變らせることが出来る  
と云ふ事實を見せて、『體』は念の影だと云ふ眞理をさとらせするため  
ある。念の影だと云ふ『體』とは肉體ばかりのことではない。幽體も靈  
體もすべて念の影である。『死は無』と云ふのは肉體のことではない。  
現に肉體細胞は刻々死滅し流轉してゐる。生き通しであるのは、斯く

ならしめてゐる『生命』のみである。『生命』のみが吾れであり汝であり  
そのほかに吾れも汝もないのである。此の『生命』をみたまと云ふ。み  
たまの形は珠のやうに真ん圓いからみたまと云ふやうに解するものも  
あれども、真ん圓いのは形のことではない。神は本來形無く、空のう  
ちに圓滿具足して自由自在であるから假りに稱して圓相と云ふのであ  
る。自由自在なるが故に或時は龍神の姿を現じ、また或る時は衣冠束  
帯の姿を現じ、或る時は天使天童の姿を現ずる。いづれの姿も権化で

あつて偽いつはりではない。しかし一つの形かたちに執しよして、それのみを吾われである  
と思おもふものは、吾わが眞實しんじつを知らざるものである。吾わが全相ぜんさうを知らざる  
ものである。汝なんぢら心こころして眞まことを知しれ。汝なんぢたちも神かみの子こであるから我われと  
同おなじきものである。肉體にくたいは汝なんぢの一つの現あらはれであつて汝なんぢの全相ぜんさうではない  
のである。(昭和七年四月十日、神示)

○

汝なんぢの肉體にくたいは汝なんぢの念絃ねんげんの彈奏だんそうする曲譜きよくふである。生命せいめいが肉體にくたいに宿やどると云い

ふのは二元げんてき的かんがな考かたへ方かたであつて眞理しんりではない。正ただしく言いへば生命せいめいはそ  
の念ねん絃げんの彈だんずる曲きよくふ譜ふに従したがつて肉にく體たいを現あらはすのである。肉にく體たいと云いひ、複ふく  
體たいと云いひ、幽いう體たいと云いひ、靈れい體たいと云いふはこれ悉ことごとく念ねんの映えい像さうに過すぎない。  
汝なんぢの念ねん譜ふの種しゆ類るゐに従したがつて或あるは肉にく體たいを現げんじ、或あるは複ふく體たいを現げんじ、或あるは幽いう體たい  
を現げんじ、或あるは靈れい體たいを現げんずる。すべてのひと人ひとはいつかにくは肉にく體たいを失うふであら  
うが死しぬのではない。人ひとは神かみの子こであるから不ふ死しである。念ねん譜ふの形けい式しき  
が變かはるに從したがつて汝なんぢの假け有うの形けい式しきが變かはるのである。すべてのひと人ひとの假け有うは

念ねんの異ことるに從したがつて、その顯現けんげんを異ことにする。念ねんの形式けいしきに大變動たいへんどうを生しやうずれば、汝なんぢの假有けううは他界たかいに顯現けんげんし、今迄いままでの念ねんの顯現けんげんたる肉體にくたいは速すみやかに自壞じくわい自消じせうする。これを入々ひとごとは死しと呼よぶが死しではない。それは『生命せいめい』が念ねんの絃げんをもつて一曲きよくを彈だんじ終をはつてそれを止やめ、他たの奏曲そうきよくに移うつらんとするにも等ひとしい。『生命せいめい』の彈だんずる念ねんの曲譜きよくふの形式けいしきに大變動たいへんどうを生しやうぜず、その念ねんの絃げんの律動りつどうにたゞ調和てうわを缺かきたるのみなるを病やまひと云ふ。かくの如ごとき病やまひは、念絃ねんげんの律動りつどうの調子てうしを直なほせば治なほるのである。併しかし如何いかにその念絃ねんげんの律

動正しくともどうたじ 初步のしよほ 一曲は必ず終つて一層高き形式の曲譜を學ばねまな  
ばならない。吾が云ふ意味は、地上の生活は必ず終らねばならないと  
云ふことである。地上の生活は汝の初步の一曲である。速かにこれを  
終るものは、初步の教本を速かに終へたものである。一曲が終らんと  
するを悲しむな。それはなほ高き一曲に進まんがためである。その前に  
調律者が来て汝の念絃の調子を正すであらう。この調律のために一時  
汝の假有は調子ならぬ調子を奏であるであらう。此の世の一曲が終る前

に肉體にくたいの調子てうしが亂れたみだやうに見みえるのは此この調律てうりつのためであつて眞しんに行ゆけ。一曲きよくは終をはるとも弾ひき手ては終をはるのではない、弾ひき手ては神かみの子こであつて不ふ死しであるぞ。(昭和六年六月二十六日、神示)

(備考)「久遠くをんいのちの歌うた」及び「久遠生命くをんせいめいの神示しんじ」は肉體にくたいが實じつ在ざいに非あらずして、久遠生命くをんせいめいのみ實じつ在ざいなることを悟さとらしむるものなれば、葬祭行事そうさいぎやうじ及び祖先靈供養そせんれいぐやうのため讀誦とくじゆすれば一層そうよろ宜よろし。

經聖

天使の言葉

天使 てんのつかひ

また語りたまふ かた

言葉は天に舞ひて五彩の虹を現じ、  
みことば てん ま

地にひろがりて最と妙なる交響樂を奏すれば、  
ち い たへ かうきやうがく そら

天童たちこれに和して てん どう わ

花爛漫の樹枝を手にし、  
はならんまん こ えだ て

身みに羅綾らすもののいと妙たへなるを纏まとひ。

翩翩へんべんとして御空みそらに舞まへば、

花葩はなびらさんくど地ちに降ふりて

地上ちじやうはさながら妙樂めうらくの天園てんのそのと化くわしたりき。

さて天てんのつかひ使みことばの言葉はのたまはく――

われは完またき神かみの啓示けいじ者しやなり。

神かみの與あたへ給たまひしところのものを

吾われも亦またなんぢ汝あたらに與あたへん。

神かみの語かたり給たまひしところのものを

吾われも亦またなんぢ汝かたらに語かたらん。

吾われは創つく造くりぬし神かみより遣つかはされたる者ものなり。

吾われは創つく造くりぬし神かみの道ことばなり。

吾<sup>わ</sup>れは創造神<sup>つくりぬし</sup>の波動<sup>ひゞき</sup>なり。

吾<sup>わ</sup>れは創造神<sup>つくりぬし</sup>より來<sup>きた</sup>りて汝<sup>なんぢ</sup>ら<sup>ことば</sup>を言葉<sup>ことば</sup>にて照<sup>て</sup>り輝<sup>かゞや</sup>か

さん。

創造神<sup>つくりぬし</sup>の光波<sup>ひかり</sup>は吾<sup>わ</sup>れにして

吾<sup>わ</sup>が光波<sup>ひかり</sup>の射<sup>さ</sup>すところ

暗黒<sup>やみ</sup>なく

やまひ

病なく

おい

老なく

し

死なし。

しん

信ずる者は限

もの  
かぎ

りなき生命を得て

いのち  
え

永遠に輝かん。

えい  
えん

か  
や

われ

我は創造神の言葉なればなり。

つくりぬし

ことば

わ

吾が言葉は吾が息の言ふ處に非ず。

ことば

わ

いき

い

ところ

あら

神かみ、我われと偕ともにありて、

吾われも亦また吾わが言こと葉はの内うちに神かみの聲こゑを聞きくなり。

吾われは喇ら叭つなり。

汝なんぢらよ——

吾われ個ひとり神よを善いしと云ことふ事なか勿なれ。

形かたちに現あられたる神かみを讚ほむるなかこと勿なれ。

吾に宿る善きものは皆普遍なる神より來る

汝なんぢら吾わが示しめすところの神かみを崇あがめよ。

吾われを崇あがめよと云いふには非あらず。

吾われはたゞ天使つかひなり。

吾われみづからの本性ほんせいの神かみなることを觀みたれば、

吾われ汝なんぢらの本性ほんせいの神かみなることを悟さとらしめん。

汝らの先づ悟らざるべからざる眞理は、

『我』の本體がすべて神なることなり。

汝ら億兆の個靈も、

悉くこれ唯一神靈の反映なることを知れ。

喩へば此處に一個の物體の周圍に百萬の鏡を按

きて

これに相對あひたいせしむれば一個こもまた百萬まんの姿すがたを現げんぜん。

斯かくの如ごとく汝なんぢらの個靈みたまも

甲乙かふおつあひわか相分あひわかれ、

丙丁へいていたがひ互あひことなに相異すがたる相げんを現げんずるげんことも

悉ことごとくくこれ唯一ゆゑいつしんれい神靈うつつしの反映うつつしにしてすべて一つな

れば

これをなんぢ汝らたがひ互きやうだいに兄弟なりと云いふ。

すべての生命いのちを互たがひに兄弟なりと知しり、

すべての生命いのちを互たがひに姉妹しまいなりと知しり、

分わかち難がたくすべての生命いのちが一體たいなることを知しり、

神かみをすべての生命いのちの父ちちなりと知しれば、

汝なんぢらの内うちおのづから愛あいと讚嘆さんたんの心湧こゝろき起おこらん。

されば汝なんぢらよ、

肉體にくたいの外形そとのかたちに捉とらはるゝこと勿なかれ。

外形ぐわいけいによつて兄弟きやうだいを相あひ隔へだつること勿なかれ。

外形ぐわいけいは唯ただ自己じこの信念しんねんの影かげを見みるに過すぎず。

無限むげんの生命いのちが、

如何いかにしてか老おい朽くつべき肉體にくたいのうちうちに宿やどること

を得えんや。

天使てんのつかひ斯かくのたまへば

翩翩へんぽんとしてみ空そらに舞まへる天童てんどうたち

舞まひ終をはりて一いつ齊せいに天使てんしに對むかひて一いふ揖ふす。

此この時とき天てんの童どう子じのううちちより

緑色の羅綾にその玉の如き身を包める

いと臆たけたる一人進み出で

『されど生命の長老よ』

と呼びかけて反問す。

『近代の科学者は頭脳にて物を思考し、

神経細胞にて物を感ずると云ふに非ずや。

頭腦づなうなく、  
神經細胞しんけいさいはうなければ

如何いかにしてか、  
物を考ものがへ、

物ものを感かんずることを得うべけんや』と。

天使てんのつかひ再び答こたへ給たまはく——

汝なんぢら、

『肉體細胞にくたいさいはう』と呼よぶ物質ぶつしつのうち

快くわいあり苦くあり感かん覺かくありと思おもふは虚まよ妄ひなり。

肉にく體たいは本ほん來らい『無む』なるが故ゆゑに。

それはたゞ想さう念ねんの影かげなるが故ゆゑに。

吾われらが肉にく體たいを忘わすれて忘ぼう我がの境きやうにあるとき。

吾われらの肉にく體たいは最もつとも完くわん全ぜんにその職はたら能きを發はつ揮きする

なり。

肉體にくたいはその背後はいごに『心こころ』ありて

想念さうねんのフィルムを回轉くわいてんして

『現世うつしよ』の舞臺面スクリーンに肉體にくたいの映畫すがたを現げんぜるに過すぎず。

汝なんぢら自己じごをば肉體にくたいなりと觀くわんずる夢ゆめを破やぶれ。

現世うつしよに於おいても優すぐれたる科學者くわがくしやは

人間にんげんを肉體にくたいなりと觀くわんぜず。

感覺は肉體の背後にある心の感じなる事をあきらかにせり。

嘗て伊太利の大醫ロンブローゾーが  
或る神經病者を取扱ひし記録を見ずや。

患者は感覺の轉位を起して

眼球をもつて物象を見ることを得ず、

指頭ゆびさきをもつて物象かたちを見るみことを得えしにあらざるや。

指頭ゆびさきには眼球がんきうなく、

網膜まうまくなく、

視神経しんけいなし、

されど彼かれの指頭ゆびさきはよく物象かたちを見るみことを得えしに

非あらざるや。

この事實は、

感覺が肉體になく、

神經細胞になく、

その背後にある『心』に在ることを立證するもの

なり。

『心』にして見ることを肯んずれば、

指頭ゆびさきも尚なほ物象かたちを見るみを得うべく。

また其その指頭ゆびさきすら無なくして

なほ物象かたちを見み、ものを聞きくことを得うべし。

天眼てんがん天耳てんじと稱しょうするもの即すなはちこれなり。

かがくせいの樂聖がくせいベートーヴェンの

有名いうちめいなる諸作品しよさくひんは

彼かれの肉體にくたいの耳聾みよしひて

物體ぶつたいの音響おんきやうを殆ほとんど辨別べんべつし難がたき晩年ばんねんに到いたりて作さく

曲きよくせられしに非あらずや。

彼かれの肉體にくたいの耳みよは聾しひたれども

心こころの耳みよひらけたれば、

こゝろの耳みよはピアノの鍵盤けんぱんに觸ふるゝに從したがひて

その微妙たへなる奏曲そらきよくを分別ぶんべつし得えたるなり。

かくの如ごとく人ひとは

心こころだに肉體にくたいに捉とらはれざれば

眼まなこなくして物ものを見み

耳みみなくして物ものを聞きき

體からだなくして物ものに觸ふる、  
こことを得うるは事實じじつにして

理論リろんにあらず。

この時とき、天てんの童子どうじ反問はんもんす

『主しゆよ、眼まなこなく耳みみなくして、物ものを見み、物ものを聞きくを

得うるは聞ききしことあれども、

體からだなくして物ものに觸ふる、ことは不ふ可か能のうにあらずや』と。

天てんの使つかひこたへ給たまふ——

汝ら近頃の心霊科學の實驗を見しことなきや。  
被實驗者は椅子に緊縛せられて一毫もその肉體

は動く能はずして、

尚、凝念の力によりて

或は机を空中に浮揚せしめ、

或は手風琴を空中に飛翔せしめ、

或あるひは手風琴くうちゆうを空中こちゆうに

或あるひは空中くうちゆうのメガホンこちゆうより聲こゑを出いださしめ、

或あるひは空中くうちゆうより

手風琴てふうきんを奏そらせしむるうことを得う、

からだ

これ體ものなくして物ものに觸ふれ物ものを動うごかし得うる實例じつれいな

り。

こころ

心こころが物ものを動うごかすことを得うるは

もの

物ものと心こころとが全然ぜんぜん別物べつものに非あらずして

「物」は「心」の痕跡なるが故なり。

例へば美術家が巧みなる繪を描くに

繪は美術家の心の痕跡にすぎざらずして、

繪は美術家そのものに非ざるが如し。

斯くの如く人間の肉體も人間の心の痕跡にして

人間そのものには非ざるなり。

念こゝろに從したがつて、

肉體にくたいの相貌かたち或あるひは美うつくしく或あるひは見み苦ぐるしく變へん化くわし、

健康けんかうもまた念こゝろに從したがつて變へん化くわす。

人ひとこの理ことわりをささとれば

意こゝろのままに自じ己この肉體にくたいを支し配はいして變へん化くわせしむる

ことを得えん。

迷妄まよひは云いふ「人ひととは肉體にくたい也なり」と。

されど肉體にくたいは人ひとには非あらざるなり。

「人ひと」の實相じつさうは神かみの子こにして、

生きいとほしの生命せいめいなれば

生滅しやうめつつねなき肉體にくたいを以もつて代表だいいへうせしめ得らるものに

は非あらず。

すべてしやうめつ生滅常なきものは

實體じつたいに非あらずして

たゞ信念しんねんの反映かへに過すぎず。

信念しんねんを變かふればまたその相すがたも變化へんくわせん。

物質ぶつは事物じぶつの實相じつさうに非あらず。

たゞ念こころに従したがつて生滅しやうめつす。

物質は念の影なるが故に。

それ自身意識を有せず。

感覺を有せず。

痛みを感ぜず。

病を感ぜざるを本性とす。

然るに物質にあり得べからざる痛苦を

物質なる肉體が感ずるは、

唯『感ずる』と云ふ念あるが故なり。

肉體に若し催眠術を施して

彼の念を一時的に奪ひ去れば、

針にて刺すとも痛みを感ぜず、

メスにて切るとも痛みを感ぜず、

無痛刺針、

無痛施術等自由自在に行はるゝに

非ずや。

『念』全く去りたるものを死體と云ふ。

汝ら死體が痛みを感じたるを見しことありや。

死體は『念』去れるが故に痛みなきなり。

『念』に従つて一つの組織を現せるもの

この『生ける肉體』なり。

されば『生ける肉體』は念に従つてその状を變ず。

『健』を念ずれば身健かとなり。

『病』を念ずれば身に病を現ず。

されば汝ら常に『健』を念じて

『病』を念ずること勿れ。

若し、なんぢの『念』にくたい肉體を去れば、

生けるにくたい肉體し死體たいと變じ、

死體はその状態を維持する『念』の力の去ること

共に、

分解して宇宙の要素に復歸せん。

肉體を去りたる『念』は、

その念ねんの力ちからにてなほ一つの個性こせいを持續ちぞくし、

幽界いうかいに於おて生活いとなみをつゞけん。

汝なんぢらの靈魂れいこんと稱しょうするもの是これにして、

『念ねん』の淨きよまるに從したがつて

それに相ふ應さはしき高たかき靈界れいかいに入り、

『念こころ』の淨きよまらざるものは、

それふさはに相應くわんきやうしき環境くわんきやうを「念ねん」の力ちからにて假作けさし、

その環境くわんきやうにくるゐて苦くるしまん。

されなんぢば汝なんぢら、

常つねに心こころを高たかく持ちして

苟いやしくも悪あくを念ねんずるなかこと勿なかれ。

苟いやしくも不淨ふじやうを念ねんずるなかこと勿なかれ。

またいやく苟もくるしみ苦ねんを念なかずること勿なかれ。

またいやく苟もやまひ病ねんを念なかずること勿なかれ。

悪あくと不ふ浄じやうと苦くるしみと病やまひとは、

神かみの創つく造くり給たまひしものあらに非あらざれば、

たなんぢが汝なんぢらのねん『念まうざう』の妄まぼろし想すせらるす幻まぼろしに過すぎすざらるすなり。

汝なんぢらやみ暗みを見みて、

暗やみを實じつざい在ざいすと信しんずること勿なかれ。

暗やみは唯ただ是これ光ひかりの非ひざい在ざいに過すぎず。

惡あくと不ふ淨じやうと苦くるしみと病やまいとは

たゞ神かみの創さうざう造ざうの無むをあらはす。

神かみの創さうざう造ざうなければ

其そこ處こに實じつざい在ざいなし。

實じつざい在いの『無む』

これを稱しょうして惡あくと云いひ不ふ淨じやうと

云いひ苦くるしみと云いひ病やまひと云いふ。

されば汝なんぢら何なんの故ゆゑに實じつざい在いに非あらざる苦くるしみを恐おそる、

や、

何なんの故ゆゑに實じつざい在いに非あらざる病やまひを恐おそる、や、

暗やみの中なかにゐて恐きようふ怖ふすれば

枯尾花も幽霊の姿を現げんず。

斯かくの如ごとく心の暗やみの中なかにやまひゐきようふて病やまひを恐きようふ怖ふすれば

非ひ在ざいの病やまひも實じつ在ざいの如ごとき姿すがたをもつて現あらはれん。

されやまひど病じつざいは實あら在ざいに非あらずして

たきようふゞ恐か怖げの反す映かに過すぎず。

心こころの暗やみの中なかに光ひかり射きたし來きたりて

なんぢ

きようふしんき

汝らの恐怖心消ゆるとき

やまひ

じせうじめつ

病はおのづから自消自滅して本來の『無』を露は

ほんらい

む

あら

さん。

なんぢ

されば汝ら、

こころ

うち

つね

ゑんまんくわんぜんしやうじやう

じつざい

すがた

心の中に常に圓滿完全清浄なる實在の相を

ゑが

描けよ。

つね ゑんまんくわんぜんむびやう  
常に圓滿完全無病なる神の子の相を描けよ。

ひと かみ  
人は神の子にして其の他の何者にも非ざるなり。

ゑんまんくわんぜん かみ  
圓滿完全なる神より不幸は生ぜず、

ゑんまんくわんぜん かみ  
圓滿完全なる神より病は生ぜず、

ふ かみ  
不 かみ  
幸 かみ  
と かみ  
病 かみ  
は かみ  
唯 かみ  
これ かみ  
五 かみ  
官 かみ  
の かみ  
妄 かみ  
想 かみ  
に かみ  
過 かみ  
ぎ かみ  
ざ かみ  
る かみ  
なり。

なんぢ やまひ  
汝 やまひ  
ら やまひ  
病 やまひ  
を やまひ  
恐 やまひ  
る やまひ  
、 やまひ  
こ やまひ  
こ やまひ  
と やまひ  
勿 やまひ  
れ。

五官くわんの感かん覺かくに描ゑがかれたる病やまひは

一毫がうも汝なんぢらの生せい命めいの實じつ相さうを病やましむること能あたは

ず、

一毫がうも汝なんぢらの生せい命めいの實じつ相さうを不ふ幸かうならしむること

能あたはず、

如い何かなる病やまひも

如何いかなる不幸ふからも

たゞ「生命せいめいの實相じつさう」の表面へらめんを掩おほへる

叢雲むらくもの如ごとき幻まぼろしに過すぎざざるなり。

その幻まぼろしはすべて

「生命せいめいの實相じつさう」を知らざる迷まよひより生しやうず、

汝なんぢら「生命せいめいの實相じつさう」を知しり、

迷滅まよひめつすれば恐怖きようふめつ滅し。

恐怖滅きようふめつすれば

一切さいの不幸ふかうと病やまひおのづから滅めつせん。

かく天てんのつかひかた使たま語り給たまへば

虚空こくうに蓬萊島ほうらいとうの如ごとき理想郷りさうきやうじつげん實現じし

島しまの頂いたゞきには水晶すゐしやうにて造つくれる宮殿きゆうでんありて

そのいらか 薨もはしら 柱もことごと 悉くすめしやう 水晶なり。

天使てんのつかひ そのしゆざ 主座ざ に坐し給たまへば

天童てんどう たちそのいらか 薨を透過つらぬ きて天てん より舞ま ひ降くだ りて

悉くことごと 天使てんのつかひ のしうゐ 周圍わ に輪ゑが を描く。

此こ の時とき いづこてんがく ともなく天樂ねりうりやう の音嚙きこ 啞ひ として聞え、

天童てんどう これに和わ し羅綾らすもの を流ながれ の如ごと く引ひ いて舞ま へば

島しまをめぐれる紺青こんじやうの海うみに

ヴェニスぶねのゴンドラごと船ぶねの如ごとき

半月はんげつの船ふねしづ静すべかに迂すべりていと平和へいわなる状態すがたなり。

此この時とき天使てんのつかひの聲こゑ水晶すゐしやう宮きゆうより出いでてて虚空こくうに轟とどる

き

地ちを指ゆびさして宣のたまはく。

「見<sup>み</sup>よ、これ實相世界<sup>じつさうせかい</sup>なり、

實相世界<sup>じつさうせかい</sup>は父<sup>ちち</sup>の國<sup>くに</sup>なり、

天國<sup>てんごく</sup>なり、

淨土<sup>じやうど</sup>なり。

父<sup>ちち</sup>の國<sup>くに</sup>には住居<sup>すまゐ</sup>多し<sup>おほ</sup>。

實相世界<sup>じつさうせかい</sup>の住居<sup>すまゐ</sup>は悉<sup>ことごとく</sup>くこれ

「生長<sup>せいちやう</sup>の家<sup>いへ</sup>」なれば

すむひと 住民に飢ゑなく、

かな 悲しみなく、

あらしそ 争ひなく、

やまひ 病なく、

よろづ 萬の物ことごとく こゝろ 意に したが 従つて しゅつげん 出現し、

ようた 用足りておのづから すがた 姿を け 消す。

圓ゑんまんぐ滿そく具しやう足じやう清み淨めら微妙せのかい世界かい

これ實相世界じつさうせかい

これ汝なんぢらの世界せかい

そのほかに世界せかいあることなし。

斯かく天使てんのつかひの宣のたまふとき

天使てんのつかひの指ゆびさし給たまふ方かたを見みれば



願ねがはくは此この功く徳どくを以もつて普あまねく一いつ切さいに及およぼし。

我われ等らと衆しゆ生じやうと皆みな俱ともに實じつ相さうを成じやうぜんんことを。

久遠くわんいのちの歌うた

是この身みは電にじの如ごとし、

電にじは久ひさしく立たつ能あたはず、

須臾しゆゆにして消きゆ。

是この身みは泡あわの如ごとし、

泡あわは久ひさしく立たつ能あたはず。  
須臾しゆゆにして消きゆ。

是この身みは幻まぼろしの如ごとし。

幻まぼろしは久ひさしく立たつ能あたはず。

須臾しゆゆにして消きゆ。

須臾にして消ゆ

是この身みは響ひびきの如ごとし。

響ひびきは久ひさしく立たつ能あたはず。

須臾しゆゆにして消きゆ。

是この身みは稻妻いなづまの如ごとし。

稲妻いなづまは久ひさしく立たつ能あたはず。  
須臾しゆゆにして消きゆ。

是この身みは浮雲うきぐもの如ごとし。  
浮雲うきぐもは久ひさしく立たつ能あたはず。  
須臾しゆゆにして消きゆ。

是この身みは水すゐ流りうの如ごとし、  
水すゐ流りうは久ひさしく立たつ能あたはず、  
念ねん々くに流ながれ去さる。

是この身みは芭ば蕉せの如ごとし、

實じつありと見みゆれども、  
中空なかくうにして實じつあらず。

是この身みは燄ほのほの如ごとし。

温あたかく見みゆれども、

一切さいを燒やき盡つくして空むなし。

是この身みは夢ゆめの如ごとし。

實じつありと見みゆれども、

虚きよにして空むなし。

是この身みは迷まよひより出いづ。

實じつありと見みゆれども、  
妄まうにして空むなし。

この身みは主しゆなし。

主しゆありと見みゆれども、

主しゆなくして空むなし。

この身みは心性こころなし。

心性こころありと見みゆれども、  
瓦礫ぐわれきの如ごとく心性こころなし。

この身みは生命いのちなし。

旋風せんぷうに舞まふ樹この葉はの如ごとく。  
唯たゞ業力ごふりきに轉てんぜらる。

是この身みは不淨ふじやうなり。

美うつくしく見みゆれども。

内うちに醜みにくきもの充満じゆうまんす。

是この身みは無常むじやうなり。

堅固けんごなりと見みゆれども。

必かならずや當まさに死しすべとききたき時臨らん。

泡あわの如ごとく、

電にじの如ごとく、

まぼろし ごと  
幻の如く、  
響の如く、  
過ぎ去るものは實在に非ず。  
す さ じつざい あら

なんぢ じつざい あら  
汝ら實在に非ざるものを、

われ  
『我』なりと云ふべからず、

まさ  
當にこれを『我』と云ふべからず。

空むなしきものは「我われ」に非あらず、  
死しするものは「我われ」に非あらず、  
無常むじやうなるものは「我われ」に非あらず。

法身ほつしんこそ應まさに「我われ」なり。

佛身ぶつしんこそ應まさに『我われ』なり。  
金剛身こんがらしんこそ應まさに『我われ』なり。

不壞ふゑなるものこそ應まさに『我われ』なり。

死しせざるものこそ應まさに『我われ』なり。

盡じん十方ばうに満みつるものこそ應まさに『我われ』なり。







